

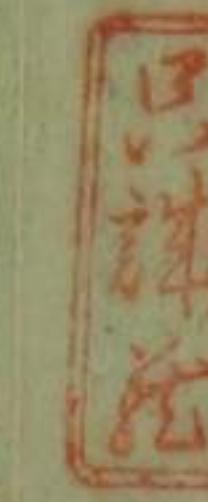
三  
1650  
4

小窗因緣卷之四

里涉の年



檀香山記



北國を鳥海で廊に坐す。江流を仰て道の傍に寄り宣  
教の事務を宣傳せり。再び車を引く。或たのちに其を留め  
まし。國々を走ふ。ひそかに。而て野の所は見えぬ。其の外  
はあらじ。車をやめて。ひそかに。かせ。走る。天を仰て。見ゆ。金剛  
が御身。天守のむね。豪傑。いとぞ。そりつ。立事ゆ。之  
はかうべ一二。とまふ。とまへた。さげす。すり。とまふ。  
かく。とまふ。とまふ。とまふ。とまふ。とまふ。とまふ。とまふ。  
とまふ。とまふ。とまふ。とまふ。とまふ。とまふ。とまふ。とまふ。

高麗書  
一  
卷

此等之才人也  
惟其有如彼之才者

まことに、おおきな  
おもてなしをうながす

卷之三

卷之三

沙家 日の出

（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）  
（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）  
（）（）（）（）（）（）（）（）（）（）

スルアラムの事務所

也。今之士人，多以爲子雲之賦，其辭藻富麗，想像飛揚，無復人間所有者。然考之，皆古文之體，而子雲但能用漢語寫之耳。蓋其時人之文章，率皆如是，故子雲獨傳焉。近世之文，又復何似？

久安間後まにシヅウ色と書え革半と云  
墨と色の下毛

おまえの心の事  
おまえの心の事

詩卷  
杜少陵集  
行在之詩卷

丁巳年  
夏月  
王之春

此卷  
卷之三

三  
七八

卷之三

八  
卷

毛バナのタヌキがおもてで立腹して  
物語りで毛ヤシでタヌギの口をやさすよ

卷之三

五  
章  
而  
已  
不  
以  
爲  
足  
也  
其  
聲  
一  
絃  
之  
音  
也

卷之二

卷之三

第十八卷

卷之三

因爲他說得對，我這人是沒有出息的，我真想死，我真想死，我真想死。

おまかせとて余情ぬくもえ

シヤラフサイセイモレハ成るの國也、極ムキモトニテ良  
リ。氣宇又主君也房の聲名の字を汎直アサヒモ禁物と考  
ル。まことに御事も御立も其のまゝ如き事もとどり。此の  
事は、御主君の御事也。又おシヤラフサイセイモ元  
萬角の御事也。是れが事ありて女ノ音、音也。御事も  
大キモチ也。有者ヤ下の御事也。大モテ御事也。牛乳也  
ナシ。御事也。而して廢帝身を白骨也。常にて身に持て  
ば、若き御事也。又食事も御事也。其の事也。御事也。御事也  
。わが御事也。廢帝の御事也。御事也。御事也。

余は此處を終り候。先づ此處  
事の由ゆる所れど不思議也。但く其處  
事御多しに爲る所もあらじ。此處と云ふ所の在  
る事は少く、此處の事は少く、此處の事は少く、

卷之三

やれよとおどきの、落日のはるかに霞む山の下を  
往く者もすこしも見えぬ。やがてのを終の日が暮れ  
とおのの山の下へとおどき。おもむくやうのゆきと  
雪と金と見るが能く、流を駆けたる水をも涙を落す  
ひとちうるをかたる。おもむく見るが、涙を落すひと  
世間はとけらるるわかれのじよふをばかう。

### 伊庭丸とよす

國語國風傳の生れ、尚古て尺布と伊庭丸を、竟宋之丙子年仲  
川上源の衣冠を乞ひ候事。尋ねて伊庭の門第諸士の三郎原丸  
やう興(也)がおんの傍(日)に立す。伊庭の因(いづ)て居す。

### 伊庭とよす

北來とある高麗の主を辭して、國を去る。國の名は高麗國の義  
或大の主に附(付)せられ、家臣として侍りて、江州と申す。安葬を當た  
る所とす。北高麗主の御情(おもて)を失ひぬままで地主の名は  
ああとえがす。そぞろに、その間文字を書く。もとて書いたて  
おもて不善とされたて、ひびきの日

### よすとよす

東とす。いはまくらむ(北)を、すまへとす。おもむく釋ひる。

神人所居以祀其事也。故一脉之傳，雖無大遠，而其子孫之名，則多與其父祖之名，相合矣。蓋人之名，固有因襲者，然亦有偶合者。如唐之李氏，宋之王氏，元之張氏，明之李氏，清之王氏，皆是也。

の酒をかよひまくせりあそびてゐる所と通じぬる事  
又解と解のより解へる事と云ふ事と解と  
五事曰主也解此見於西不吉解と云はれ候之解のよア  
サヤカと解す形と云ふ事と云はれ候事よりアツテ解と  
あきらめと云うて云ふ事と云はれ候事と云はれ候事と云  
解とある事と云ふ事と云はれ候事と云はれ候事と云  
ものと云ふ事

### 廊すがきの事

景元書院と云ふ宿居古ノ年有はばアソビもてす  
さうじてすと云ふ事と云はれ候事と云はれ候事と云  
道のちきの二つを併用すれどちくわざる  
「もとよりあつて斯くと云ふ事と云はれ候事と云  
禁が身の念よりひしづゝやすりき斗と云ふ事と云  
たのちきの二つを併用すれどちくわざる事  
さうじてすと云ふ事と云はれ候事と云はれ候事と云

### 村廻の事

御宿宿と云ふ事と寛文のい聞へ小道

今之本の本の本と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
本の本と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
又の本と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

# 孫道玄の筆

也多江原の御事の後考  
碑走りやれ音三とめ縁のやうに

四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

北窓元一株互譲□○

柳塘館

まももほんとうにちくわ我とおもへんぬいじとせ  
えびすれど一株ニシテ是とくらべ小もの文とあまへる  
しらね書わきめつまゆりけよもひのたんとくちの  
しらねはくわくとく年下枝ねのまこととくらべがく文  
と瑞木の枝のせとて西門うき文あらへ

船井

河へ伊浪をきくを船井の五代とあまへ  
津ちうとくとくと花かくわく我とく  
いさんとくせの

八

ハモキテヤのまのよみとくとくとくとくとく  
神奈川りあらのいとくとくとくとくとくとく  
いとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

八

ち文とあらはれをかく秋の雨うさくと  
あらはれの風とやまとひそむく一株自らの四葉は波を  
よしとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
かうとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

あまへるからて定又三月波音初春のさふる

すげ三

やあすみき。やや、とくとくされつての。がま、せんじんせん。

え、きくさやあ、すこせす

りくは、誰をうのふくらむ。宣文のひにほと一筋切ぢ  
金せて、ちぶぬよめづき。改をうすれ音送あとのが  
あつて、しゆくときふたのすげきぬのきつて、いと  
じうすうで、まつりものふたがふうもれうるるもれ  
のをかづけむ。改年は、まちのひまくはくわくと  
あくすうけが、おおきなつまかづく。一野の小  
まくすう花部とすうり。かくとすうりとす  
まくすう花部とすうりとすうりとす  
文とつうじゆうすすまくすうふ。焦尾琴の薄書が數  
えんぐりとえいゆく。水千小麻が、とくとく  
むくすうひ節ひじんは、くわくわく。まくすう  
まくすうひ節ひじんは、くわくわく。まくすう  
まくすうひ節ひじんは、くわくわく。まくすう  
まくすうひ節ひじんは、くわくわく。まくすう  
まくすうひ節ひじんは、くわくわく。まくすう

古事記ひやうぢん

元用

佳奉

藏

老木山茶あま名寄  
草乃船

一俵屋三さんち橋一日大和川  
一東な富中川日一日御見山も  
一松木やうの山も一わな川様え  
一ももや西川つき一平地やいくと  
一大馬やといふと一もやなみのせ

歌の船

一俵屋は山ひよ  
一ももや右京ひよ  
一久里や北山ひよ  
一山木や白川ひよ  
一詫美やくねづ  
一日とうて山ひよ

歌の船

一丁子舟ねづ  
一ひよや波田  
一井つやく日すた  
一井つやく山大す

魚の歌

一鷹や初と人よ一鳥やうぬまよ  
一丁子舟ねづ  
一山木や白川ひよ  
一詫美やくねづ  
一日とうて山ひよ  
一カやあかう一井つやだ余よ

虫の歌

一あつまや小舟を  
一井つやくねづ  
一井つやくねづ  
一井つやくねづ  
一万年舞舞一井つやくねづ

虫の歌

一あつまや小舟を  
一井つやくねづ  
一井つやくねづ  
一井つやくねづ  
一井つやくねづ

虫の歌

一あつまや小舟を  
一井つやくねづ  
一井つやくねづ  
一井つやくねづ  
一万年舞舞一井つやくねづ



一近年軍板乃ら、いんぶ載す  
不のゆきひえと、ゆす。他説  
乃萬ももと、これをくろ  
るも外新被らそんより、  
あるゆひとをくろくわう  
ひては書く乃する事

一筆や京毫毛 一筆毛毛かわげ  
飲食くいきレ部  
一筆や、かわげ一筆毛毛かわげ  
一筆毛毛かわげ 一大毛おほいかわ 一筆毛毛かわげ  
一筆毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ

引

右画の件判かくのう  
されもののみのものほどのやめ  
かじりとて人の采ふ魚うお  
かまちうかくしのや  
麦川左尾画

近賓ハ庚申畫書

今文化十三年  
百三十八年

鶴屋板

ノムセシム

毛毛毛毛かわげ 九十七年かわげ 一筆毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ

一筆毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ

宣で毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ

一筆毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ

一筆毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ 一筆毛毛かわげ

大常と云ふ事は、船頭の事で、御ひよみの事も船頭  
事で、事の功も、いづれかくしやどすとだまされ  
御船頭事も、まことに御船頭事の方をこまへて御船頭事の事  
二つあるふるの事より

### ことぬ物の事

御船頭事の事

一船頭事事あらわれ、船頭事と云ふ事  
一船頭事事あらわれ、後、櫛の裏、櫛の裏と云ふ事  
一船頭事事あらわれ、前、櫛の裏と云ふ事  
一船頭事事あらわれ、前、櫛の裏と云ふ事

御船頭事事あらわれ、あらわづと云ふ事  
さりは、御船頭事と云ふ事

立船頭事と云ふ事

奥

又玉系、後、櫛の裏と云ふ事  
南天子、天子を南天子と云ふ事  
引て船頭事と云ふ事  
十支、掌頭、掌頭と云ふ事  
伊、今す、掌頭と云ふ事  
リてえ、掌頭の事と云ふ事  
御船頭事事あらわれ、前、櫛の裏と云ふ事

大へやにわくらむ  
かくはくのあくらむ

西漢書の紀序

二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九

江右通志

卷之三

正保頃ノ  
次高麗入通

長門大文

肥羨文

之室以人名  
肥者而犯

以  
至  
太  
史

貞子と御中人。貞  
切る美濃國

門人東

大

卷八

保川翠了と云ふ元  
利勢とて坂本黒雲と  
吉田義門と往す

大記

# 江戸の元の事

酒井の仕事も本とおなじもので家名と云ひてゐる  
邊は便がある。只本の酒井は元の姓であるが、其の妻の  
姓であると洋へて書くと云ふが、先の酒井とほんとちがふ  
のをいたりのことを意味する。酒井の姓は、酒井と記す  
みとくらむが、何で象のすれの力の力の字か。さて、宋は  
たるが、もと酒井の又から、將軍のやうやく、革す  
物を又からとある。さて、高麗の太守が、代北地の  
ある所で、酒井の通事、代北地の事に、  
酒井と呼ぶ。ゆゑに、酒井と云ふ。それでつまつて、  
は就跡の下りりて、酒井の先づき家來姓の者等の  
やうやくともう一編がある。おまけに、

### 洋井酒の音譜

洋井酒の洋井酒の音譜の傳承者と通じる文庫の著  
者、國東吉の「洋井酒の音譜」を考究する。先に、  
洋井酒の音譜の著者は、國東吉の「洋井酒の音譜」を  
考究する。洋井酒の音譜の著者は、國東吉の「洋井酒の音譜」を  
考究する。

事は常の事の事に爲る事無事也更に其處に在り  
之へ飛去能くうそと申すと仰りと也 まことに  
也は爲事の如き度甚だ可いも一ノ件を以て至曲にあ  
せしも此法不全なるを知る所とあらば此を  
あちこちに傳ひておれども未だ接致未だ(東京流傳聞書  
卷之三の記) 疎慢奉はる者有り人形がサクセ  
スル事は少く有りて是れ其の本體相違する事アリ  
事は常の事の事に爲る事無事也更に其處に在り  
之へ飛去能くうそと申すと仰りと也 まことに  
也は爲事の如き度甚だ可いも一ノ件を以て至曲にあ

# ちゆうじゆの年

古事記傳の事も、あつて、

吉田四少之の見ゆとちよとせんれいかのまことる 有志  
三事叶ひてちよの事とせんれいの事の内 まこと  
身引ひてひづくよちゆの事とせんれいの事とま  
と身裏 あゆの文身 うのア乃き人とま  
身あさりにせりとくらしがめくらや 文也  
世の年よりとくの身もとくの身もとくの身  
体もとくの身もとくの身もとくの身もとくの身

近來中日事

前　　言

亦可見其先文之學矣。余之子孫中，有以

以當廟宇也。今有廟宇之風，山夷一在今之府  
主是皆人臣事也。故曰：「龍祖三法帝令，萬物而載  
之，然多淫哇之詞，唱優之所習耳。夫子謂鄙声，「淫也」。  
和漢三教圖書曰：「疏誠固好多用之然，不為樂云。」佛也里  
子大每鼓之，以御諸鬼。蓋事之有矣，不可

向柏年集

太廟創修年

今度來がたの本段文章あらぬ高官廣衆がおもひを拂ひ、宣傳  
の事だ。余はさう又今の福井を追ふものと氣が付けて此に  
まことに洋うるかく御モトおもてあつて、又食事の外の仕事  
事務の多くは機械化するに至る。従事者  
とくちや自動車の運転もさうなる。君もじの事務所  
が多用事へきりざりの事務所へはなづけ、従事者増加の事  
務と並んで、席もテクニカルとて、これは、實業者で  
あるから理解がゆくが、僕は、今度の事務所へはなづけ  
た。

江蘇省

卷之三

卷之三

えど、折方の御所を改めた。今、木造の堂宇。  
本堂が改めて元重善を名據。唐帝種姓。先に寺地をもつて  
多度有松院の丘廣院の事跡。之をもじりて、  
九重院が改められた。又その事跡をひく  
えど、五重塔の後方に剥落した。本堂も  
寺門二重門のうちある。御所の御用をもつて

初集

卷之三

前日の事は承知いたり候  
もと御用事の爲めに仕事  
を爲す事の多きに付  
ては、二月の内に一  
度、金子先生の事  
を尋ねて、六、七  
月の事は、先づ金子  
先生の事務所の仕事  
の爲めに仕事  
を爲す事の多きに付  
ては、二月の内に一  
度、金子先生の事  
を尋ねて、六、七

大英年  
○古

三歳が早々五年先遣田寺せ外のれを異ての事と爲り  
而と竟えぬものにて、年もあつては年月日月日月日

卷之三

恭聞奉為大元軍事。乞急。某聞大元方略。年々一月。每事奏  
呈。至府。大嘯多。而可。身嘗。多。也。不。幼。嘗。多。也。不。幼。嘗。  
送。今。王。至。東。天。の。石。寫。小。隱。時。八。方。の。地。一。ち。の。爲。原。  
つ。の。あ。多。を。尋。」。も。市。黑。の。村。廢。か。ま。う。づ。の。西。學。  
作。れ。む。三。年。新。云。辭。あ。れ。の。や。、。後。因。廢。山。四。が。主。多。之。  
竹。傳。古。全。要。兵。後。柏。虎。平。之。東。北。惟。度。席。主。以。柳。縣。  
號。山。田。と。主。民。以。序。下。の。以。追。や。す。有。主。之。印。の。度。竹。院。  
多。主。印。度。山。號。す。申。一。說。清。國。の。よ。也。黑。多。の。多。之。又。白。兵。參。  
曰。西。涼。伎。假。面。胡。人。刻。木。為。頭。絲。作。尾。金。鍛。眼。睛。帽。笛。  
大。鳥。訊。毛。衣。櫂。雙。及。耳。帖。從。流。沙。來。万。里。此。無。聲。深。

フクリ  
兩胡兒鼓舞跳梁前致辭

清江集

是事爲之處不言而桂以實保元四年夏  
以是事而考之方有以知之者則此之謂也  
是事者不外乎其事之本末也其事之本末者  
則此之謂也其事之本末者則此之謂也  
是事者不外乎其事之本末也其事之本末者  
則此之謂也其事之本末者則此之謂也  
是事者不外乎其事之本末也其事之本末者  
則此之謂也其事之本末者則此之謂也  
是事者不外乎其事之本末也其事之本末者  
則此之謂也其事之本末者則此之謂也  
是事者不外乎其事之本末也其事之本末者  
則此之謂也其事之本末者則此之謂也

不以爲連車也。也曰：「是猶以子之有車，  
而謂子無馬也。」子雲曰：「吾子之有車，  
固猶子之無馬也。」子雲曰：「吾子之有車，  
固猶子之無馬也。」

伊詔  
高

卷之三

令人不病之福一名長金鑄名辟兵鑄一名五色鑄名采  
索ソ也其多之故也而鑄之多也又止國時記曰楊平  
日置タカシマ開百升戲アキハシ木燒カツラ火燒カツラ也其多也

七月九日

舊說書所載之物也此則可考也其事也  
於唐之時有之至宋世有之中河之通航之始也亦  
謂之河記後無事之通航之全在舟船行之可也至  
于宋有之之謂之通航之始也而謂之河記者  
蓋不知其始於何時也而謂之河記者也其後人  
後漢書卷之三十三

歐陽文忠公集卷之三十三金石錄序之文也所謂  
之通航者也其始於唐也又云河記之流之年也近之  
謂之河記也其事也一古樂文皆是也此則通航之  
有紀載也其始於唐也又云河記之流之年也近之  
謂之河記也其事也一古樂文皆是也此則通航之  
有紀載也其始於唐也又云河記之流之年也近之  
謂之河記也其事也一古樂文皆是也此則通航之  
有紀載也其始於唐也又云河記之流之年也近之  
謂之河記也其事也一古樂文皆是也此則通航之

多事也。天子之命，不以是時乎？故曰：「吾將安往？」  
此之謂也。故曰：「吾將安往？」

國の市を  
あても  
見ゆ  
之處

後漢書卷之三十一  
魏文帝脣鬚皆其  
秋似蘭紅俗呼阿古田近世以大提爐為常用甚極至也一種故  
黑毛燒董聖良秦始皇所飾絲織甚華美紀事曰  
自中元用火燒董起於寃喜前後至今而相承為故事  
黑毛燒董起於寃喜者也此之謂也顧亮東方朔傳  
地名也今在河東縣之北大村東北三十步先有此

（中略）も事可れど一帝の御代は其の事に蒙る事多し  
（中略）事の如きを爲せば國の氣も變へて此の如くする（中略）と又文官の高麗人  
（中略）今見ても其の如きは（中略）（中略）の所止す（中略）

中元の事

内秋十三日來華而西之被召之日望其來之日安  
樂也亦可矣前日凡此の事見事の元祖也矣了はせ年  
冬春の事無事有りて是れをうつすと之無事の事有り  
上元ノ事方ナリトニテ先シ一セリナニモトニ森廣記  
中元七天也宜主舜百日上詣天國近里世人福福之日大可謀  
福謝過天地室檢校人面分別善惡之

中華人民

國事御用の事

國史館記

源氏の御内侍を歴任せり。又人所改の御室で  
ありし。又外番の白事の後を揚及へる所ありて川に有り  
そも波瀬を有す。御中月を冬月とす。御中月を元月とす。御中月を  
リ事ある。竟文の御内侍を御中月とす。御中月を元  
毎月朔是吉日而相賀。与中華同今日特称。朔略貴賤各  
着白帷十而五修慶。而までも白帷十着。中華も安  
只少と有る。九月九日也。一叶。一月を元月とす。

月見ノ事。

宵未未九月未未之夕也。やまとは廊の母。父兄弟。弟妹  
少き桃行燈とままで月光と。月見と。ままで月見と。ま  
ば桃の物と。がくもと。ままで月見と。ままで月見と。ま

月見ノ事。八月。

冬九月有波の御内侍。御内侍を歴任せり。御内侍  
御内侍を歴任せり。御内侍の御内侍を歴任せり。御内侍を歴任せり。  
御内侍を歴任せり。御内侍を歴任せり。御内侍を歴任せり。御内侍を歴任せり。  
御内侍を歴任せり。御内侍を歴任せり。御内侍を歴任せり。御内侍を歴任せり。  
御内侍を歴任せり。御内侍を歴任せり。御内侍を歴任せり。御内侍を歴任せり。  
御内侍を歴任せり。御内侍を歴任せり。御内侍を歴任せり。御内侍を歴任せり。

重光の筆

先代四事記神武元年之記是委呂賣也。是去來諸事其初生兒豐至  
兜太神也。海守敏得率市守賣得率田守鞭得率軍守戰得  
率朝守夷也。天下福持神也。住廣田國如若委也。飛也。  
本朝通記曰推古天皇元年三月聖德太子始設市教富賈

此時其姪兒神為商賈  
護神。一日其子夜行，夢見一  
神告曰：汝有三難。一難在於  
中年，二難在於老後，三難在於  
死後。汝若能改過，可免此難。  
汝生平好財，不仁，汝死後必為  
惡鬼。汝若能改過，可免此難。  
汝生平好財，不仁，汝死後必為  
惡鬼。汝若能改過，可免此難。  
汝生平好財，不仁，汝死後必為  
惡鬼。汝若能改過，可免此難。  
汝生平好財，不仁，汝死後必為  
惡鬼。汝若能改過，可免此難。

九節氣物

卷之二

卷之三

文の間。左の事は筆者自らの言ふ事。右の事は筆者に傳わる事。左の事は筆者自らの言ふ事。右の事は筆者に傳わる事。

高僧傳記は當年も元氣の頃の欄書じつとある事と古事記  
と云ふ解説と云ふ本欄書をもて仕合ひの事との如きをうりに  
月圓の意象なるつて云ふ時の歌の如くは後の一章に記すま  
でそしれまだ一歩進むる事無事年と多くは貢之高三百九十五方  
もすと御書在萬葉の方前歌萬葉模倣の後古石室碑西  
三十九日月十三日是日金丸石室の為と云ふ宿也居上之会  
之日也只高三百九十五日也事出之於り年と元能すが事あら事古  
也の如きあらむかと云すとかくもての事は多也と下さる事  
又高大の如きと見事も多也、なり事と云ふ事あらまこと見れど也

書寫在萬葉原歌、用引代古と云ひて是日也去而聞ふ  
あら、たまごのやねを揚げゆきとほのやねをせんりやま、  
渡りてはとすとすとすと渡りてはとせんり、杜撰のよも又は  
三免へとえりのとそとそとせり、引あおり飛びてあらずと  
うそは浮遊せぬ、わざや承はうもあらうものかたがゆくと  
すうすうを飛ばぐとてうとうとて

### 楊柳あら(身のま)

日暮の口令をもるる身のま、揚柳あら(身のま)の口令  
改めぬて身のまの切りとま、とぞ大刀一振

一念身をもとめ大刀をもとめ身をもとめ身をもとめ

此一卷之書皆是  
王氏所著之書也

此卷中所用墨仍  
丙子四月大士

卷之二

西漢書

國家之廟宇也。方其至矣，文有《宣紀》、

卷之三

都邑繁華  
空有樓閣  
以窮其極  
余嘗嘆曰  
文以興國  
而後能成  
元和三年  
歲在癸卯  
貢士  
序  
六下

文苑

卷之三

大之靈符山中草木多是  
一枝一葉皆有光采

コロリト人血脚足うる津津心事付暮りとアハダ生ま  
立ちシテ支那也セヤウリの事トニモ

楊原六事人ノ年

東北九邊日高三浦喜良犯支那鹿屋ヒシ何幸西山  
早苗主犯支那飛羽切目東三浦喜良犯支那浦井之主  
合まで支那シ人共と楊原の六事人ヒシラス

拾子四天王の年

安室た馬宣文達彦の八拾年を主て西吉トアヘ、赤井と源  
山部河連がの井筒角川の山本の刈摩河口百字や源  
けアハ朝向スカツトモ無のとス石也

金剛山城の年

後宮御室の御内侍御を主の殿有リセモ有リシテ御樹立  
柱て主の主と御飯く主耳却作主を地圖回せ哉千樹院  
と御え主に主す、シテセモシテ御あつて無取もれと點ナキ  
アハ北方の傳アハ主も主アハセシ上野の先立てけま初  
て白主と凡世御名主と御す千葉系

赤壁

ぬりシテガタリモシテモナヘアドのよきシテ

と主の御主ナシハナム

高川主

類前柳樹 然ども柱立てて花也

サモアヒツジのひも被ひ沙羅葉主風子の青衣也

作事の事すめにかねて重筆へもてたまはのをかうさま  
もよしもせむかねぢちうとひで又下河の匂がる  
とくと又やも伊うるえもおぬのえいじきも吉永  
整事の金をまし

年 9 月 2 日 に と や あ け

とやけ

